

# 京都教育大学FDニュース

No. 102  
2023年12月26日  
京都教育大学FD委員会

\*\*\*\*\*  
本学におけるFD活動の一環として実施している「授業アンケート」へのご理解とご協力を感謝申し上げます。  
今回のFDニュースでは、2023年度教育学部前期授業アンケート結果、第1回FD研修会について報告いたします。  
\*\*\*\*\*

## 1. 2023年度教育学部前期授業アンケートについて

### 1. 調査の概要

実施期間：2023年7月19日（水）～8月1日（火）

対象科目：受講登録者6名以上の全授業科目

対象科目数：320 実施科目数：301（未回収19、実施率94.1%）

実施科目のべ履修者数：12,878名 有効回答数：10,316名（有効回答率80.11%）

2023年前期のアンケート実施率は94.1%で、2016年前期以降においては最高の数値を記録しました。2022年度前期の84.5%より9.6ポイント急伸びしました。授業担当の皆様のお力添えに心より感謝申し上げます。実施科目における有効回答率（有効回答者数/実施科目履修者数×100）は80.11%で、2022年前期とほぼ同水準でした。

### 2. 結果の概要

#### (1) Q.1「授業を選択した動機」について

当該科目を受講した動機は、科目の性格（必修度の強弱）で上下しています。各専攻領域において免許取得に必要な不可欠な科目では、当然ですが「必修だから」が多くなり、選択の余地が大きな科目では「必修だから」は少なくなります。多様な科目があり必修度の高い科目が珍しくない本学の性格を考えると、Q.1については授業担当が一瞥する程度の利活用で十分だと思われます。

#### (2) Q.2～Q.15の結果について

これらの項目については、実施後に返却されるレーダーチャートのみで一喜一憂する授業担当者が多いかと存じます。しかし、全体平均との比較だけをしては実はほとんど無意味です。なぜなら、専門性の高い少人数科目（演習など）と共通教育科目のように総じて受講生が多い科目では、前者が対話型の授業を実施しやすいのに対し、後者では一方通行的で古い形態の講義スタイルが多くなるからです。

そこで今回のFDニュースでは、初めての試みとして、履修者規模別にみた科目グループに設問番号ごとの評定平均を集計して、その傾向からアンケート結果の利用に役立つように工夫してみました（表1）。

表1 履修者規模別にみた2023年度前期授業評価アンケートの設問番号ごとの評定平均

受講生数	科目数	Q.2	Q.3	Q.4	Q.5	Q.6	Q.7	Q.8	Q.9	Q.10	Q.11	Q.12	Q.13	Q.14	Q.15
全科目	301	2.70	3.37	2.49	3.16	3.23	3.25	3.20	3.17	3.53	3.21	3.17	3.44	3.09	3.16
6～9人	18	2.59	3.24	2.59	<b>3.43</b>	<b>3.38</b>	<b>3.65</b>	<b>3.59</b>	3.26	<b>3.69</b>	<b>3.47</b>	<b>3.52</b>	<b>3.57</b>	3.13	<b>3.58</b>
10～19人	57	<b>2.89</b>	3.27	<b>2.77</b>	3.38	3.32	3.50	3.39	3.16	3.62	3.41	3.35	3.48	<b>3.19</b>	3.43
20～29人	61	2.70	3.40	2.59	3.31	3.36	3.39	3.32	3.21	3.56	3.29	3.26	3.47	3.12	3.29
30～39人	34	2.79	3.35	2.49	3.18	3.26	3.31	3.23	3.18	3.54	3.26	3.22	3.46	3.13	3.25
40～49人	33	2.70	3.35	2.61	3.23	3.29	3.25	3.17	3.11	3.63	3.18	3.08	3.54	3.04	3.11
50～59人	28	2.73	3.35	2.55	3.09	3.19	3.17	3.11	3.11	3.56	3.17	3.09	3.48	3.03	3.08
60～69人	10	2.82	3.33	2.62	3.12	3.20	3.27	3.24	3.13	3.59	3.23	3.20	3.50	3.08	3.14
70～79人	14	2.69	<b>3.21</b>	2.44	3.08	3.16	3.18	3.16	3.23	3.47	3.14	3.12	3.36	3.06	3.10
80～89人	23	<b>2.59</b>	3.44	2.40	3.08	3.18	3.23	3.20	<b>3.30</b>	<b>3.41</b>	3.22	3.20	3.34	3.13	3.18
90～99人	11	2.64	3.33	2.12	<b>3.03</b>	<b>3.11</b>	3.16	<b>3.10</b>	3.16	3.50	3.21	3.18	3.40	3.10	3.09
100人～	12	2.68	<b>3.47</b>	2.46	3.07	3.20	<b>3.11</b>	<b>3.10</b>	<b>3.03</b>	3.53	<b>3.03</b>	<b>3.03</b>	<b>3.15</b>	<b>3.01</b>	<b>2.93</b>

(2023年度前期授業アンケートにより作成)

- 各質問の内容については本文参照。
- 質問番号のフォントがゴシック体のもの(Q.10・Q.13)は、中間に「ちょうどよい」を含む5件法による質問であり、その他の質問番号は、全て4件法による質問である。
- アンケートは、受講生数が6人未満の科目、集中開講の科目については実施していない。
- 正体の数値は質問項目ごとの平均値以上の評定平均（最大値に網掛け）、斜体の数値は同様に平均値未満の評定平均（最小値に網掛け）を示している。

Q.2～Q.15の質問内容は次のとおりです。

- Q.2 シラバスを参考にしたか
- Q.3 これまでの出席状況
- Q.4 授業時間外の学習
- Q.5 意欲的に取り組んだか
- Q.6 評価する資格があると思うか
- Q.7 授業の満足度
- Q.8 テーマ・領域に興味を覚えたか
- Q.9 教員になる意欲が高まったか
- Q.10 授業は難しかったか【5件法】
- Q.11 授業は体系的だったか
- Q.12 説明はわかりやすかったか
- Q.13 テキスト（配布資料）のレベル【5件法】
- Q.14 授業の進む速度（進度）
- Q.15 理解や反応に合わせた進行

表2 少人数科目(6～19人)と多人数科目(70人以上)の評点比較

科目群	Q.3	Q.4	Q.5	Q.7	Q.8	Q.9	Q.12	Q.15
少人数科目	3.26	2.73	3.39	3.54	3.44	3.18	3.39	3.47
多人数科目	3.37	2.37	3.07	3.18	3.15	3.20	3.20	3.09

(2023年度前期授業アンケートにより作成)

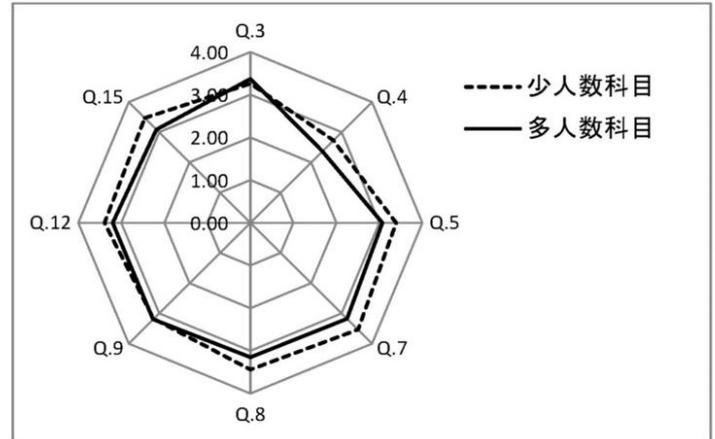


図1 少人数科目(6～19人)と多人数科目(70人以上)の評点比較

(2023年度前期授業アンケートにより作成)

上記のうち、Q.10「授業の難しさ」とQ.13「テキスト（配布資料）のレベル」は、「5：とても難しい、4：やや難しい、3：ちょうどよい、2：やや易しい、1：とても難しい」からなる5件法で問い掛けられた質問です。他は4件法による質問で、4から1にかけて肯定的評価から否定的評価へ漸移します。なお、Q.4は「4：2時間以上、3：1～2時間、2：1時間未満、1：ほとんど無し」で回答を得ています。

表1・表2・図1をみると、総じて少人数科目（履修者6～19人）で肯定的回答が多い傾向がみられ、多人数科目（履修者70人以上）では肯定的回答が少ない傾向が認められます。こうした傾向は、少人数科目には演習（ゼミ）や実験など授業担当者と履修者との距離が近い科目が多いことから、当初より目的意識の高い履修者が集まっていることをうかがわせます。逆に多人数科目では「履修者は授業担当者を知っている、授業担当者は全ての履修者を詳しく知っているわけではない」という状況が生じやすいため、それが各質問項目で肯定的回答が多くないことにつながっていると考えられます。多人数授業は「一方通行型の授業」と揶揄されることも多いですが、授業スタイルが一方通行になると、授業担当者と履修者との理解はその逆の一方通行になってしまう危険があることを、授業担当者は肝に銘じておくべきではないでしょうか。

ただ、一部の質問では、肯定的回答が多人数科目で最高値を示すことがあります。その典型例がQ.3「これまでの出席状況」とQ.9「教員になる意欲が高まったか」です。Q.3については、授業担当者と履修者との距離が近い少人数科目だと口頭での欠席事由の説明等がしやすい一方、多人数科目では平常点（科目によっては履修カルテに使うための資料）を管理しておく必要性から授業内課題や宿題が多用されるため、欠席し難いという事情があるのかもしれません。Q.9については、必修度が高い多人数教科では入学からの年数が浅い履修者が多く、新鮮な気持ちで受講に臨んでいることが関係しているのではないかと考えられます。

また、30～69人の履修者がいる中規模人数科目では、Q.5「意欲的に取り組んだか」、Q.6「評価する資格があると思うか」、Q.11「授業は体系的だったか」、Q.12「説明はわかりやすかったか」、Q.14「授業の進む速度（進度）」、Q.15「理解や反応に合わせた進行」で肯定的回答がやや少なくなっています。とりわけ上述したQ.11以降の4つの質問については、より多人数で実施されている科目よりも評価が相対的に低くなっています。多人数科目では、円滑な授業運営のために授業担当者が慎重な授業設計を行っていると推察されます。中規模人数科目の設計や実践はなかなか難しいものですが、少しの工夫で改善できるチャンスが残されていると発想の転換をしてみたいかがでしょうか。

### 3. 今後の授業改善に向けて

冒頭に「全体平均との比較だけをしても実はほとんど無意味」と記しましたが、上の2で述べたように履修者の多寡によっても評定平均は実に大きな影響を受けています。大切なのは、各々の授業担当者が担当科目の経年的な評定平均の変動を知ることです。たとえば「ここ数年で評定平均が顕著に上がっている（あるいは下がっている）」というような場合、何が原因でそのようなになっているのかを授業担当者は知っておく必要があります。「ICT を活用した授業への対応を新たに盛り込んでみた」「毎回の授業内に提出させるミニレポートを課して、そのフィードバックを翌回の授業の導入に取り入れた」ということが評定平均の上昇につながることがあります。逆に「面倒なのでここ数年は教材提示のスライドを全く改良していない」「加齢による眼の衰えのため提出されたレポートを丁寧にチェックできなくなった」「研究や会議に忙殺されるので授業準備を怠っているかもしれない」ということが評定平均を下降させているかもしれません。

こうした変化を読み取るには、授業担当者が自身の担当している科目のデータを過去のデータと比較して検討しておくことが有効です。本学の LiveCampus では、授業担当者が過去の授業アンケート結果を参照することもできます（図2）。各質問項目の評定平均値だけなら、比較的軽いエクセルファイルに保存しておくことも難しくはないはずです。まずは個々の教員が自身の担当科目の実態を正確に知る工夫をしていただければ幸いです。その経験を FD 研修会で共有できれば、それこそが FD 活動の本来あるべき姿ではないかと、私たち FD 委員会のメンバーは感じています。

Live Campus の「その他」に「授業アンケート結果参照」のボタンがあります。ここをクリックすると、これまでの担当授業科目の授業アンケートの結果を見ることができます。

Copyright(C) 2012 NTT DATA KYUSHU Co.,Ltd All rights reserved.

図2. 本学 LiveCampus での過去の授業アンケート結果の参照について

### 4. 実効的な授業評価アンケートの実施に向けて

FD 委員会では「少人数科目の授業評価アンケートは決して正確ではない回答が寄せられている（=気心が知れた関係の間では無記名であっても厳しい評価を下しにくいなど）恐れがあるうえ、全体平均にそれが影響を及ぼしてしまうと統計的な精度が著しく低下するので、前例に従って少人数科目のアンケートを継続するのはやめた方がよい」との意見も出されています。

組織というものは保守的・守旧的な色を帯びがちなので、新しいことを始めるのは比較的簡単でも、既に実施されているものや既存のものを改変・廃止するのは大きな困難を伴います。「本学の財政は極めて厳しい」との主張が重ねられる一方で、科目数の整理や統廃合、カリキュラムの簡素化は遅々として進んでいません。こうした組織改編の先駆けとして、少人数科目のアンケート調査は「希望する担当者のみが実施する」というように改革を図るの

も一つのアイデアです。委員の中には「履修者数が20名未満（19名以下）の科目は『希望者のみ実施（実施したい授業担当者の意思は妨げない）』と変更した方が、中規模科目や多人数科目の実態把握、ひいては授業改善に資する」と主張する者もいます。中規模科目や多人数科目は、その規模からして多くの履修者の利害と深く関係しています。その実態を正確に把握して改善を図ることこそが、本学の授業の質の担保に寄与するのではないのでしょうか。この件に関して、読者の皆さまから多くのご意見を頂戴できれば幸いです。

## 2. 2023年度第1回FD研修会について

2023年10月11日、第1回FD研修会が「セクシャルマイノリティ学生への配慮・対応」をテーマに開催されました。開催に先立ち、中FD委員長から今回の企画趣旨の説明と講師の体育学科浅沼徹先生の紹介が行われました。

本研修会の目的は大きく2つあり、1つ目はセクシャルマイノリティに関する基本事項を理解すること、2つ目はセクシャルマイノリティ学生の困難な事例と配慮・対応を学ぶ、ということでした。1点目については、生物学的性（からだの性）、性自認（こころの性）、性的指向（好きになる性）、性表現などの人間の多様な性の基本的な用語の確認、そして、これらの多様性を認めていくことを指針とした「ジョグジャカルタ原則」が紹介され、全ての国家が遵守すべき国際的法規となっていることが示されました。また、LGBTQに該当するものは日本人の約7.6%（13人に1人）であるという人口統計も紹介いただきました。この13人に1人ということは、概ね各クラスに3名弱在籍するということを意味し、クラスやあるいは職場においてもセクシャルマイノリティの当事者がいることを前提とするものの必然性が示唆されたといえるでしょう。加えて、生物学的性と性自認が一致しない「性同一性障害」のメンタルヘルスにおいては、自尊感情の低下、自傷行為、希死念慮、自殺企図・未遂、精神疾患などがある一方で、周囲に1人でも理解者がいれば、希死念慮を抱くLGBTの子どもの数は約30%減少するとの報告も紹介いただきました。

講演の後半は配慮・対応の例を紹介いただきました。その基本となるのは、セクシャルマイノリティは珍しくないという前提を基本態度とし、相手の性を決めつけず、本人の意思を尊重した個別の対応を行うことにあるということです。ついつい日常の授業内で発言してしまいそうな「そのの、後ろの男性！」などの具体的なNG例も挙げながらご講演いただきました。

講演会の最後、太田学長より、ご自身の留学時代のエピソードから「受け入れたほうが生きやすい社会を示す」という体験を披露いただき、僅かなことからでも本講演の内容を日々の授業や研究指導に活かしていくことが最初の一步であるというエールを頂戴し閉幕となりました。



\*\*\*\*\*  
内容について、問い合わせなどがありましたら、下記の委員までお願いいたします。

FD委員会委員：中（委員長）、寺田、香川、牛山、亀田  
（事務担当：糟谷、村田、西松）